

阿武隈川上流域における 縄文中期から後期への集落変化

福島県三春町柴原A遺跡と越田和遺跡の発掘調査から

Change of Colony in the Upper Reaches of the Abukuma River
from the Middle to the Late Jomon Period :
From the Excavation Survey of the Shibahara A Site and the Koshitawa Site
in Miharu-machi, Fukushima Prefecture

福島雅儀

FUKUSHIMA Masayoshi

はじめに

①時間軸, 土器型式の整理

②住居の変化

③そのほかの集落施設

④越田和遺跡の集落変化

⑤柴原A遺跡の集落

⑥集落の変化

おわりに

【論文要旨】

縄文時代中期から後期に移る期間, 土器型式で4型式程度である。土器編年の相対的時間からみれば短い時間幅である。ところが炭素年代測定による絶対年代によれば, それは500年以上の時間であるという。これが正しいとすれば, これまでの考古学的解釈は大きく見方を変えなくてはならなくなった。そこで小論では, 阿武隈川上流域の柴原A遺跡と越田和遺跡の発掘調査成果をもとに当時の集落変化について考えてみた。

縄文時代中期末葉の集落の中心施設は, 複式炉をともなう竪穴住居である。このほか水場遺構と土器棺墓が検出される程度である。後期初頭には, 石囲炉をともなう4本柱の竪穴住居が造られ, 屋外土器棺墓が増加する。また掘立柱建物も受容される。続いて, 掘立柱建物が増加するとともに, 柄鏡形敷石住居・石配墓も導入される。さらに後期前半でも新しい段階の柴原A遺跡では, 平地式敷石住居, 広場, 石列, 石配墓群, 焼土面による集落に変化した。

東北地方に広く分布するとされた複式炉も, 上原型に限定するとそれは阿武隈川上流域から最上川上流域, 阿賀川流域に特徴的な炉であった。また石囲炉を伴う4本柱穴の住居は, 阿武隈川上流域に限定的に分布している。敷石住居においても, 柄鏡の柄が大きく発達した平地式敷石住居は, やはり阿武隈川上流域を主な分布圏としている。そして, 集合沈線による地域色を持った土器が作られている。阿武隈川上流域は, 仙台湾沿岸地域と関東平野を結ぶ通路ではあったが, この時期, 南北の両地域とは異なる特異な生活様式を創造していたといえよう。

また, この期間土器型式が連続していた遺跡でも, 営まれた集落は断続をくり返していた。集落の規模も20名程度であった。大規模に見えた集落も小集落の重複による累重の結果であった。

【キーワード】 縄文集落, 複式炉, 敷石住居, 柴原A遺跡, 越田和遺跡